

週日の説教

金 大烈 神父 2010年1月14日(木)

《自分の傷をイエス様の前に差し出す》

今日の福音(マルコ1・40-45)の内容は、先週の金曜日の福音と全く同じ内容です。ただ、今日の福音はマルコが伝えたもので、先週の金曜日の福音はルカが伝えたものです。しかし、ほとんど同じ内容です。そして先週の金曜日には、「その皮膚病にかかった人は、人に話さないように厳しく言われても、言い広めなくてはられないくらいの嬉しい気持ちだった。私たちもそのようなイエス・キリストとの出会いが必要ではないか。」という話をしたことを覚えています。

今日は少し違う観点から、重い皮膚病について、お話をしたいと思います。

日本では、差別語だという理由で、「ライ病」とか「ハンセン病」という言葉を使っていません。日本語の聖書だけは、「重い皮膚病」という表現をしています。でもそれは、「ライ病」「ハンセン病」のことです。

私は28歳くらいの頃(1980年代)、修練の一つの課程として、ライ病の村に派遣されたことがあります。韓国は日本と違い、ライ病や隔離されている病気の人々の世話を、ほとんどカトリック教会が行っています。韓国には、ハンセン病の人々が暮らしている村が幾つかあるのですが、ほとんど神父やシスターが国からの支援をもらって世話をしています。私は、フランシスコ会と一緒に生活をしながら管理をし、その人々の面倒を見ている南の方の村へ派遣されました。

私は、性格的に敏感なところがあります。子どもの頃から、魚や内臓などの食べ物の好き嫌いがものすごく激しかったです。ある日、遊びに出ていて、屠殺場に並んで入る牛の行列を見ました。涙を流している牛の姿を見て、それから牛肉は食べなくなりました。そのくらい、子どもの頃は敏感さを持っていました。

ハンセン病については、感染しないということなども聞いていたのですが、やはり派遣される時には緊張しました。その村に着くと、神学生が来たということで、盛大な歓迎会を開いてくれました。そして一緒に食事をしました。口では「おいしい。おいしい。」と言いましたが、心は楽ではありませんでした。そして、ミサになると人々の体に触れることになります。心ではそうではないんですが、体が拒みました。それを考えると、本当に恥ずかしかったです。そして、あちこちの家へ食事にも招かれました。その家へ行けば、子ども達と一緒に笑顔で遊びました。たまにはその人々は、何本も残っていない指でおにぎりを作り、それを自然にさし出すのです。それを「ありがとう」と言いながら食べなければなりません。そして、逃げるように司祭館に帰るのです。そして、吐きました。

それが二日間続きました。あまりにも辛かったので、三日目に、その村にいる青い目のスペインの司祭に相談を求めました。そういう場所にいるのが辛かったのではなくて、自分が心では受け入れられるのに、体ではその人々を受け入れられない、ということが辛かったです。表面的には、笑顔で、最後までみんなを感激させるくらいの振る舞いを見せました。しかし心の中では、体が拒む反応に、恥を感じてたまらなかったのです。「私はこういう場所に来て、何よりも自分の弱さを認めなければならない状態です。心は本当にパニック状態です。どうしたらよろしいでしょうか。」と言いました。す

ると、その司祭は、「私も同じでした。」と話してくださいました。

彼は、『フランシスコ会のハンセン病の聖者』と言われるくらいの有名な人です。朝鮮半島に渡って40年以上、ライ病の人々と一緒に暮らした方です。その村の外には絶対に出ない人です。いつもその村で、人々と暮らしていました。その司祭から、「私も何年間もそういう気持ちと戦いました。しかし、その弱さを認めたら、神様が解決してくださいました。」という話を聞きました。そして本当に不思議なことに、その夜から全く拒みがなくなる体験をしました。そして、そこで2か月間暮らしたのですが、最後の日まで、全く平気でその人々と交わりができました。

日本に派遣されて最初に担当した教会の管轄に草津という場所がありました。そこに、ハンセン病の村がありました。韓国のハンセン病の村より、もっと気の毒なところでした。本当に疎外された村でした。そこには、殖民地時代に朝鮮半島から連れてこられてハンセン病にかかり、収容されている韓国人も二人いました。その二人が亡くなるのも見守りましたが、その時も、韓国でのそのような経験があったので、全然難しさを感じずに、司牧をすることができました。

さあ、なぜこのように長く説明したのかご説明します。今日の福音に「イエス様が手を差し伸べて触れた。」という表現があります。私の時代には、ライ病が感染しないなどの常識を教えられました。それでも私は拒んだのです。2000年前の、医学的知識が何もなかった時代にこのような重い皮膚病にかかった人は、人間としては認められなかったでしょう。その病気にかかった人自身も自分を呪われた存在と思っていたでしょう。そして、自分の持っている傷が恥になったでしょう。家族にさえ接することができなくて、自分の人生を放棄しなければならなかったでしょう。そのような人が、どのくらい懇切な心でイエス様の前に跪き、願ったのでしょうか。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。」と。するとイエス様は、憐れみを感じ、手を差し伸べてその人に触れ「清くなれ」とおっしゃいました。

今日の話の黙想しながら感じたことは、私たちは傷を持っていて、その傷を恥と思い、「隠したい」「見せたくない」と感じているということです。勿論、人によって、この恥を『人を抑える武器』として使う人もいます。私たちがもっと神様に愛を感じるためには、自分の傷、自分の恥をイエス様が触れてくださるように、イエス様の前へさし出す勇気が必要ではないかと思いました。

皆様、私たちが本当に救われるため、信仰的に癒されるためには、自分が持っている暗いところ、隠したいところをまずイエス様に見せようとする勇気を求めなければならないと思います。

ありがとうございました。

(ミサの終わりに)

もし皆様が、そのような病気にかかったとしたらどうしますか。何が望ましい態度だと思いますか。私は変わらない信仰が必要ではないかと思います。“『不死の病』というものはない”と私は信じています。本当に信仰者ならば、そういう方がいる時にはまず、「心を尽くして懇切に願えば、神様は聞いてくださる。」という信仰が必要だと思います。諦めるのは、信仰者らしくない態度です。全てのものを造られた神様の力でできないことがあるのでしょうか。私たちは「弱くても出来るだけあなたを信じます。癒してください。」と祈ることが必要ではないかと思います。

ありがとうございます。